

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】小菅真奈

【所属】(助成決定時) 奈良女子大学大学院人間文化総合科学研究科 博士後期課程 比較文化学専攻 文化史論講座

【研究題目】平安期の文学作品にみる「山伏」

【研究の目的】(400字程度)

平安期の「山伏」について考究する。「山伏」とは、山に入って修行する呪術的宗教者であり、また験力を得る修行をすることから験者とも言われ、さらに修験道の担い手(修験者)として人々の修行を先導してゆく存在でもあるとされている。このような「山伏」のあり方については、中世後期から近世を中心として研究が進められ、それが他の時代にも敷衍される傾向にあり、古代における「山伏」の歴史的な位置付けは不明確である。また、「山伏」と深く関わると思われる修験道の定義・成立についても十分な議論がなされてこなかった。

しかし近年では、黒田俊雄氏の顕密体制論の提唱とそれを受けた寺院史・宗教史研究の盛興の中で、修験道を相対化し歴史的に位置付けなおそうという試みがはじまっている。以上の研究動向を受け、その担い手とされる「山伏」もまた歴史的に変化する存在なのではないかと考えた。特に、9世紀後半から11世紀頃の史料に散見する「山伏」を分析し、当該期において彼らがいかなる存在として認識されていたのかを明らかにする。

【研究の内容・方法】(800字程度)

古代の「山伏」は編纂史料や古記録に少なく、大半が仮名の文学作品にみられる。これが、古代の「山伏」が歴史学であまり顧みられてこなかった理由の一つではなからうか。しかし、私は「山伏」が文学作品に登場することに意味があると考え、文学を歴史学的な視点をもって分析した。そのことにより、当該期の人々の「山伏」に対する認識の一端を明らかにすることができる考えた。

「山伏」は『後撰和歌集』に収録されている素性法師の和歌にはじめてみえる。この点からも、「山伏」が超時代的な存在ではないことが明らかであろう。素性は宇多法皇の宮瀧・龍田山参詣に随行しており、このような好機に巡り合えた自分自身のことを卑下して「山伏」と称している。そしてこれ以降、同じような用法の「山伏」が仮名の文学作品に多数散見する。特に『うつほ物語』の会話文においては、卑下の意味合いを含んだ自称として、さらに同書の地の文においては、山で生活したり修行したりする人々のある一定の状況下での言い換えとして用いられている。このように平安中期の「山伏」は周囲の人々との関係性の中で使用される言葉であるといえよう。未だ修験道の担い手として人々の修行を先導し、独自の生業を営む存在としては認識されていないのである。

以上の認識が変化し、山々を踏破し修行するイメージが「山伏」に定着するのは『新猿楽記』成立期頃であると考えられる。ここには「山伏修行者」という言葉がみられ、「山伏」と「修行」が明確に結びついている。『梁塵秘抄』にも「山伏修行」がみられ、さらに「山伏の好むもの」が列挙されたり、「山伏の腰につけたる法螺貝の」とあったりすることから、当該期の「山伏」が単なる自称や言い換えではないことが明らかである。また『狭衣物語』には、会話文・地の文ともに周囲の登場人物との関係性に影響されない「山伏」が登場している。しかし、彼らは未だ修験道の担い手ではない。これらはともに過渡期の表現であると考えられる。

【結論・考察】（４００字程度）

平安期の「山伏」について、仮名の文学作品を中心に検討してみると、当該期の「山伏」は自称や言い換えとしての言葉であったことが明らかになった。中世後期から近世にかけての、一般の修行者を先導し、独自の生業を持つ存在とは異なっているのである。このことは「山伏」の意味するところが歴史的に変化していることを示している。このような「山伏」が平安中期に登場したのは、当該期に御岳詣や熊野御幸が興隆し、修行者のみならず王族や貴族が入山するという歴史的事象が起こったことで、山に関わる人々の関係性が新たに捉えなおされたからではないか。よって、この時期に「山伏」が登場したことには歴史的な意味があると考えられる。

さらに『新猿樂記』においては「山伏」と「修行」が明確に結びつき、現在わたしたちが想起することのできる存在に一步近づいていると思われる。なお、近年では修験道が成立するのは13世紀末から14世紀頃であると考えられている。本報告では修験道成立前夜の「山伏」について明らかにすることができたと考えられる。